

# 1 鉾山史研究と考古学

## はじめに

日本鉾山史研究のなかでも、金銀山遺跡に関する考古学的な研究はようやく新たな一歩を踏み出しつつある。それは石見・佐渡・甲斐などの戦国期から近世前期にかけて、日本はもとより世界有数の鉾山としての位置を保った遺跡に対する考古学的研究が開始され、しだいにその成果があらわれはじめたからである。とくに奥深い山中に眠る遺跡に光があてられ、文字にあらわれない世界が少しずつ見えはじめた効果は大きく、これまでの文献史学や鉾山技術史を中心に構築されてきたわが国の鉾山に対するイメージをしだいに変えつつある。<sup>(1)</sup>

本章では、考古学による鉾山史とくに金銀山史研究を概観しながら、中世後期から近世前期ごろの金銀山の経営のあり方や今後の鉾山史研究はどうあるべきかを、いくつかの課題に分けながら考えてみたい。

## 1 小葉田淳博士著『日本鉾山史の研究』とこれまでの金銀山史研究

わが国の金銀山史研究は、近世初期から日本最大の生産量を誇った佐渡金銀山や石見銀山に関する諸研究に負うところが大きい。なかでも、佐渡金銀山における研究は豊富な文献史料や絵画史料などが駆使され、また近年ではさま

さまざまな角度からの考古学的調査が開始され、金銀山での多様なあり方が明らかにされている。田中圭一氏の『佐渡金銀山史の研究』〔田中一九八六〕や佐渡金銀山に関わる各種の調査報告書はその代表的成果である。むろん、佐渡金銀山にかぎらず、わが国の著名な金銀山に関してはそれぞれの地域においてさまざまな形で調査され、着実に研究の成果があがっており、これらの総体としてわが国の金銀山の全体像が結ばれている。

これらの個別的な研究とは別に、全国の鉱山を通覧して体系的な鉱山史像を描いたのが小葉田淳博士であり、『日本鉱山史の研究』〔小葉田一九六八〕であった。このなかでは、わが国の代表的な金銀山がとりあげられ、金銀山の立地から鉱山の技術、経営のあり方などが文献史料をはじめ、さまざまな資史料群から論じられており、まさに鉱山史研究上における不朽の著といつてよい。この著作によつて、金銀山に対するイメージがつくられ、そのあり方が明らかにされた事例は多い。たとえば、甲斐国の金山経営について博士は次のように論じながら、経営主体たる金掘たちの性格づけを行い、のちの研究の基礎を作った。

「後世の諸家の由緒書中には、金山衆は金山掛奉行であつたように記したものもある。近世諸藩の金山奉行は、藩より派遣されて鉱山支配に任じた藩役人である。金山衆はそうではなくて、間歩・掘場の所有者稼行主であり、山主（山師）である。甲駿地方では、彼らは領主と被官関係をもつ名主的武士であり、金山衆は山主集団であるとともに武士団を形成していたらしい」〔小葉田一九六八・二八六頁〕。

金銀山の経営者でもあつた金掘たち、彼らは甲斐国内や戦国大名武田氏の支配が及ぶ領域内では、「金山衆」という独特の呼称で呼ばれていたが、その金山衆たちの自立的な動きを重視して、戦国大名から一步引き離し、金山という山の世界で働く民としての性格づけを行い、新しい金掘像を導いている。この視点は、戦国大名の権力下にながちり組織込まれてしまった従来の金掘像から解き放ち、新鮮で、かつより実像に近い金掘像を描くことに成功している。これは従来の甲斐金山史研究が武田氏権力論の枠の中で論じられつつ、視点を武田氏側から見下ろしていたことに

対して、小葉田博士は金掘そのものに照準をあて、その目の高さから金掘たちを眺めたことにより編み出されたものであった。金山はまさに山の世界であり、鉾山職人や商人たちの活躍の場でもあり、その場に焦点をおいた小葉田博士の論証は的確であった。

ところで、この小葉田博士の著作が出版された段階では、わが国の戦国期を中心とする初期金銀山遺跡に対する考古学的調査研究は進んでおらず、実際に金銀山という山の世界が、個別的にいったいどのような構造をもち、いつごろから操業が始められ、どのような変遷過程をたどるのか、といったような直接金銀山に関わる基礎的な内容についてはほとんど知られていなかったといつてよい。小葉田博士の著作は文献史料や絵巻などを含めた鉾山関係の史料群を縦横に駆使し、金銀山遺跡の踏査によつて大成されたものだが、しかし考古学的資料の欠落による限界は否定できないものであった。

## 2 考古学的調査研究

鉾山遺跡、とくに本章で対象とする中世から近世前期ころの金銀山遺跡に対する考古学調査は、一九八〇年代に入つてから少しずつ始められる。北海道今金町の美利河地区における砂金採掘跡の調査は八一年「長沼他一九八九」、島根県の石見銀山の調査は八三年ごろから始められており「太田市教委一九八四」、そのころからわずかではあるが調査結果もあがりはじめている。しかし八六年になると、山梨県の黒川金山を舞台に考古学や文献史学、民俗学などによる総合的・学術的調査が開始され、金銀山遺跡に対する本格的調査の段階に至つた。この調査は、中世から近世にかけての金銀山に対する総合的調査のおそらく初の事例であり、刻々とたたらされた調査成果は戦国期の武田氏研究はもとより、日本の鉾山史研究にたいへん刺激的なものであった「黒川金山一九八七・一九八八・一九八九」。後述するが、その